

## 146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査紹介 その2

### 13. 東海・北陸・山陰系の土器供伴

#### 近江町高溝 狐塚遺跡

昭和59年度より実施している民間宅地開発に伴う狐塚遺跡の発掘調査は、今年度は西側について調査を実施した。当遺跡は縄文早期末大川式押型文の出土が知られているが、今回は同時期と思われる石鏃・石匙を発見した。弥生前期新段階の壺片は、稲作の始源を教えてください、弥生中期末の沼状落ち込みに廃棄された挟入石斧は長さ14cm、刃幅3cm、厚さ4cmを測り凝灰質頁岩で北九州や朝鮮半島の石材と同一である可能性が高く、祭器として伝世されていたことも考えられる。

古墳時代前期には方形周溝墓2基・溝2条が検出され、在地の受口状口縁を有する甕の他に胎土が異なる布留式甕・明らかに東海からの搬入品であるS字状口縁を有する甕や欠山式の影響を受けたパレススタイルの丹塗壺・山陰の鼓形器台・北陸月影式の壺等、地理的環境も反映して畿内はもとより東海・山陰・北陸との交流を示す古式土師器がある。

礎遺跡は狐塚の西方にあり、ほ場整備に先立つ事前調査において古墳時代前期布留期の高杯・小型器台・小形壺を出土する溝1条、奈良時代の3間×2間の掘立柱建物2棟等を発見した。布留期の高杯は多分に東海の欠山式の流れをくむものである。

狐塚の東南方に立地する顔戸遺跡では縄文土器

の出土が見られ、前期北白川下層ⅡB式爪形文や大蔵山式凸帯文・中期船元式や里木式・後期中津式・晩期馬見塚式条痕文土器が確認される。

以上3遺跡は地域的にみると息長氏の拠点集落という位置付けができ、朝鮮半島をも含めた周辺地域との交易関係を如実に物語っているものと理解される。

今後、縄文集落のあり方、弥生～古墳時代の交流、古墳・寺院と集落との関係、集落の推移等研究すべき課題が多い。

(近江町教育委員会 中川 通士)

### 14. 古墳時代の木製品多量に出土

#### 米原町下多良 入江内湖周辺遺跡

今回調査を実施した入江内湖周辺遺跡は、従来まったく知られていない遺跡であった。ところが当該地に滋賀県立カルチャーセンターが建設されることとなり、事前に試掘調査を実施したところ、木製品が出土した。このため、昭和60年3月より7月まで改めて約5,000㎡を発掘調査した。

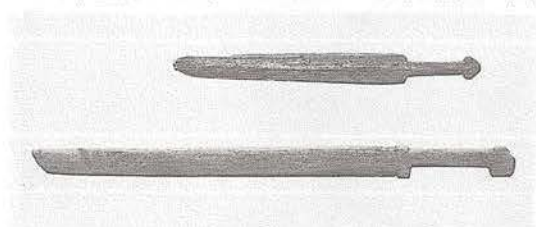
本遺跡の基本的な層序は、1盛土、2旧耕土、3灰色粘土、4黒色腐植土、5青灰色粘土、6暗褐色腐植土(スクモ層)、7灰色砂となっている。これら堆積層のうち、第6層中に多量の木製品が保存状態も良好に包含されていた。同層中の共伴土器が庄内～布留式であることより、木製品もほぼこの時期のものであろうと考えられる。

出土した木製品は数百点にのぼっている。主なものとしては、建築部材(柱・梯子)、武具(鞘・弓)、厨房具(竪杵・槽・四脚盤・火鑽臼)、農耕具(鍬・鋤・柄・えぶり)、祭祀具(刀形・剣形・舟形・円盤)、運搬具(舟・櫂)、機織具など多岐にわたっている。

このうち四脚盤と円盤には直弧文様の装飾が施されており、注目される。また直径40cmを測る大型の木製



挟入石斧



剣形・刀形木製品

高杯も出土しており、見込み部分にはベンガラ朱が塗られている。

今回の調査で遺構は自然流路しか検出されなかったが、調査地全域に木製品を包含するスクモ層が確認でき、入江内湖遺跡の範囲がさらに広がることがわかった。また出土した木製品は、今後の近畿地方古墳時代木製品の基本的資料となりうるものであり、今後の遺物整理に期待されよう。

(米原町教育委員会 中井 均)

## 15. 旧内湖岸の縄文後・晩期遺跡

### 彦根市松原 松原内湖遺跡

下水処理施設建設工事に伴う松原内湖遺跡の発掘調査は、今年度で2年目を迎えた。昨年度の調査では小銅鐸等の弥生時代の貴重な資料を得ている。今年度の調査は旧内湖東岸を対象としたものである。調査では古墳～江戸時代の少量の遺構、遺物を除き、縄文時代後・晩期の各種資料を多量に検出した。

さて、これらの資料の中で最も注目すべきものは、ヘラ状木製品と丸木舟である。ヘラ状木製品は、琴の祖形とも考えられるものであり、昨年度出土品の他、青森県是川中居遺跡、北海道忍路土場遺跡、三重県納所遺跡のみで出土例が知られる。松原内湖出土品はそれらの中でも最も遺存状況が良く、格子文、山形文も優れたものである。全長43.7cmを測る。丸木舟は完形品2艘を含め9艘分以上の資料を得た。小断片となって検出されたもの以外は、全て海拔83m前後の地点で検出した。同時代の範疇で理解できる長命寺湖底遺跡では海拔81m強、元水茎遺跡では海拔83m前後でそれぞれ丸木舟を検出したと言う。松原内湖遺跡での検出レベルは元水茎のそれとはほぼ一致する訳である。このように丸木舟の検出レベルに2者が存在する事実は、今後の琵琶湖・内湖の水位変動史を考えるうえで多くの問題を提起するものとなろう。

その他、今年度の調査では生駒山西麓産の土器や隠岐産の黒曜石・下呂産のサヌカイト等の交易を知らし



ヘラ状木製品出土状況

める資料、石棒・男根形木製品・小形土器・土壇墓・土器棺墓といった祭祀・葬礼を示す資料、建材(柱?)に使用されたと思われる木製品等の興味深い資料を多量の土器類とともに検出している。

(勸学県文化財保護協会 細川 修平)

## 16. 特別史跡「彦根城」

### 県立彦根東高校校内武家屋敷跡発掘調査

今回の調査地は彦根城中掘と内掘によって区画された内曲輪(二ノ丸)にあたり、昭和55年に実施された同校体育館建設に伴う調査地の西側に隣接する。当地区は「御城下惣絵図」等より、代々四千石を有し、彦根藩老中の要職にあった長野氏の館である可能性が指摘されている。

調査の結果、表土下約0.3mの深さで厚さ約0.1m程の後世の焼土層があり、これを除去した第4層上面で館関連遺構(第一遺構面)が検出された。第一遺構面は調査区西側半面で良好な遺存状況を示すものの、東側半面では後世建築物による削平が著しく、館関係の遺構を把握することができなかった。この部分については更に約0.3m掘り下げ、第5層上面にて不定形の浅い土坑群を検出して第二遺構面とした。

館関連遺構には、漆喰遺構、石組溝、埋襲土坑等があり、個々の機能については現在他の武家屋敷平面図より検討している。いずれにせよ屋敷地のかなり奥向の部分にあたるものと考えられ、使用人等の生活空間一厨房施設等が想定される。長野氏については諸資料よりその人物像を描き出そうと試みている。しかし、他の老中は度重なる政変の都度、禄高、地位等に變動が見られるが、その中において長野氏は比較的安定した地位を保っていた様であり、彦根藩関連の近世文書の記事にも名だけが散見し得るだけで、政治の表舞台には登場してはこない。

出土遺物はその大半を陶磁器が占める。昭和55年の調査出土遺物に比してやや生活に多用される陶磁器が多いものと考えられ、そこから調査地のもつ屋敷内に



第一遺構面(屋敷跡)全景(東より)

おける機能等が導き出されるものと期待している。  
(勸励賀県文化財保護協会 清水 尚)

## 17. 奈良～平安時代の集落跡検出

### 甲良町尼子 尼子南遺跡

当遺跡は昭和59年、60年度の調査において竪穴式住居、掘立柱建物、溝等が多数検出され、出土遺物より7世紀前半から12世紀に至る大集落遺跡であることが確認されている。

今回の調査においても60年度調査区に隣接する地区より8世紀代と考えられる掘立柱建物が数棟検出された。一辺約0.8mの方形掘方を持ち、柱穴は径約0.2～0.3mを測る。しかし、遺構が密に存する範囲は60年度調査区より約30m程度北側までであり、当該地における8世紀代遺構群の北限の一部分が把握されたものと考えられる。

この8世紀遺構群の限界より更に北側には平安時代後期(12世紀代)と考えられる集落の拡がりが見込まれ、本調査においても掘立柱建物、土坑等が検出されている。しかし、この平安時代の集落は奈良時代の整然と立ち並ぶ建物群とはかなり性格を異にし、むしろ散村といった集落景観が考えられよう。

(勸励賀県文化財保護協会 清水 尚)



奈良時代遺構群(北西より)

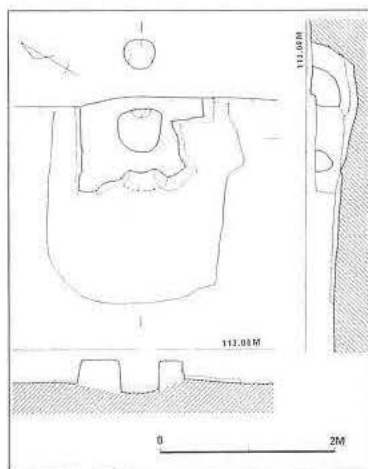
## 18. 白鳳～平安時代の集落跡検出

### 甲良町下之郷 下之郷遺跡

湖東平野の北部を流れる犬上川の左岸扇状地上に当遺跡は立地する。この扇状地上には、7～8世紀代の集落遺跡が密集しており、長畑遺跡・法養寺遺跡・尼子南遺跡・四十九院遺跡・雨降野遺跡と下之郷遺跡が半径1.5kmの円内に所在する。

当遺跡は、昭和59年度に新たに発見された遺跡で、県営は場整備に伴う調査として3年目にあたる。

これまでに発見された主な遺構は、竪穴住居跡60棟と掘立柱建物27棟であり、7世紀前葉から9世紀前葉に至る年代が求められる。このうち、遺跡は3つの大



竪穴住居跡に伴う大形カマド

きな画期に区分される。

第1期は、竪穴住居で構成されている。その中心には一辺約9.2mを測る大形の住居があり、周辺にカマドを持つ住居が主軸を寄せて配置される。

第2期は、竪穴住居と掘立柱建物で構成される。竪穴住居は第1期に比較して小形になり、カマドを屋外に張り出す傾向を示す。また掘立柱建物には竪穴住居と主軸をそろえ、群を構成するものもみられる。

第3期は、掘立柱建物で構成され、主軸と同じ方位の畦畔遺構を伴う。この畦畔は、遺跡南方の愛知郡に広がる古地割(N5°W)と合致し、犬上郡南部における平野(扇状地)の開発を捉える上で貴重な資料となる。

現在までに確認された遺跡の範囲は、南北500m・東西300mを測り、次年度以降に継続する調査によって下之郷遺跡の全容が明らかにされると期待される。

(勸励賀県文化財保護協会 宮崎 幹也)

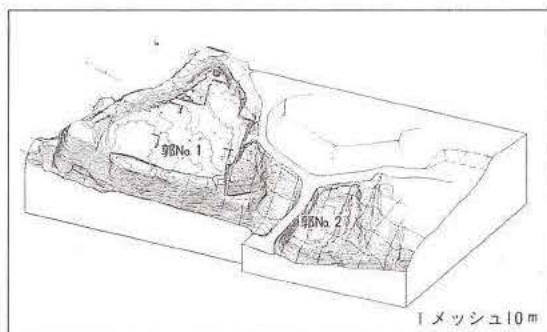
## 19. 寺坊か城か。大規模土塁確認

### 多賀町敏満寺 敏満寺遺跡

敏満寺は平安時代～室町時代に栄えた中世寺院で、現在の胡宮神社(多賀S.Aの南に位置する)付近を本堂として、南谷・北谷・西谷とよばれる広い伽藍を持ち、多くの塔堂が建ち並んでいたとされている。今までの調査においても、数多くの坊跡や南大門跡とされるものが確認されており、今は名神高速道路がこの伽藍のほぼ中央を南北に縦断し、西谷とされている丘陵は多賀S.Aとなっている。

今回の調査はこの西谷の北西部で、枝状に分かれた尾根の先端部にあるテラス状平坦面、二面を中心に行った。ここは平野部との比高差が20m以上ある高台で、眺望は良く、北は佐和山から、南は観音寺山までを一望できる。

調査した二面は、いずれも軍事的な色合いが強いため、各々郭跡No.1、No.2とした。No.1は尾根先端部を空堀により切り離し(この空堀の多くは車道のため多くを埋め立てられているが、たち割りの結果、東西に貫通している可能性が強い)周囲を高さ1～5.5mの



俯瞰図

土塁で囲み、北端に櫓台、南西角に入口施設を設けている。内部施設は後世の攪乱が激しく多くを残していなかったが、直行する数条の溝、礎石立ちの建物、9m以上の深さを測る石組の井戸等が検出された。No.2は、「コ」字状に土塁が囲み、南側に2条の空堀がはいる。

出土遺物は多くが15世紀後半から16世紀初頭におさまるものであり、土師器皿、国産陶器、輸入磁器等が検出された。また遺構面、遺構埋土、礎石等におびただしい焼土、炭、もしくは火を帯びた痕が残っていた。

以上のことにより当遺跡は16世紀初頭に大きな火災を伴う破壊がなされ、以後利用されることなく破棄された軍事的色合いの強い遺跡と考えられる。今後、敏満寺及び地元土豪との関係や、16世紀初期の軍事的施設として多くの研究が期待される。

(勸励賀県文化財保護協会 横田 洋三)

## 20. 方形周溝墓群と条里村落の一部検出

### 能登川町 柿堂遺跡

昭和61年度分は59年度より3ヶ年計画で実施した最終年度の調査であり、昨年度平面プランを確認した方形周溝墓・自然河道等の掘り込みを行なった。

まず方形周溝墓は5基検出しているが、最大規模のものは一辺約19mを測り、周溝の深さは深いもので約0.8m程度である。また、そのプランについては、対応する辺に陸橋部をもつものや、張り出し部をもつものが目につく。その他、自然河道と周溝が小溝によって連結しているものや、ほとんど同一箇所においてひとまわり大きなプランでつくり替えを行っているものなどが特徴的である。出土遺物は、供献用と考えられる壺、高杯の土器類が一括出土しており、概ね弥生時代後期前半頃に比定されるものである。板材等の木製品も出土しているが、これは一部周溝内埋葬の可能性を示唆するものとも考えられる。なお主体部は遺存していなかった。

上記方形周溝墓群の北側では最大幅約15m・深さ約1.8mを測る自然河道を検出している。この河道がコーナーを成す部分には、杭材を打ち込んで構築された



堰検出状況

と考えられる堰があり、堰によって得られた水を取水するための用水路と考えている。おそらく、この用水路の両側には水田が広がっていたものと思われる。なお、この河道の時代観は上記方形周溝墓と同様のものと考えられる。

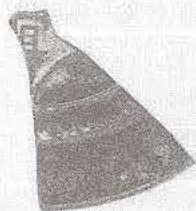
その他には、13世紀頃の条里制地割観内での掘立柱建物群を検出している。これらは3グループ程度に分類され、それぞれに1間×2間の建物を対でもつことが大きな特徴としてあげられる。

(能登川町教育委員会 山本 一博)

## 21. 古墳時代前期の自然流路から祭祀遺物・漁撈遺構

### 能登川町神郷 斗西遺跡

斗西遺跡は和田山山麓から延びる微高地の中核に位置し、隣接する中沢遺跡とともに弥生時代末から中世に至るまでの複合遺跡として周知されている。今調査での主な検出遺構は自然流路2条、竪穴住居十数棟、ピット群等である。2条の自然流路は幅約8m~15mで北東から南西方向に蛇行しており、調査地の西部で合流している。そのうち北溝は当該遺跡古墳時代集落の一応の北限を示すものと考えられ、古墳時代の竪穴住居に近接する北側からは多量の木器、土器が出土している。このうち木器では舟形・剣形・刀形をはじめとする祭祀遺物が良好な状態で出土しており、ほかにも滑石製の有孔円板や手づくね土器等も認められている。さらに、船載内行花文鏡の破砕片が出土している。残存は内区を中心としたバチ形で端部に若干のくびれを有し、いわゆる懸垂鏡としては県内では初見のものである。鏡片からの復原径は約10cmを測り、内区に「長宜子孫」銘の「宜」が読みとれる。この鏡片も含め以上の遺物群は古墳時代における河川祭祀の一例証として注目されよう。



自然流路出土・船載鏡

さらに自然流路では二つの堰と、漁撈遺構と考えられる杭列が検出されている。これは川幅の狭まる位置

で約50cmピッチで打たれた杭列が4列認められたもので、杭列間には葎の茎の束を敷き並べられたものが遺存していた。葎の束と杭列との結束状況の復原は困難であるが、上流で検出されている堰と合わせて琵琶湖から遡河する湖魚を捕る「上り簗」ではないかと考えられ、内水面漁法の歴史的展開を解明するものとして貴重な資料といえよう。

(能登川町教育委員会 植田 文雄)

## 22. 文献と対比できる中～近世遺構検出

### 五個荘町宮荘 宮荘清水ヶ井遺跡

五個荘町のほぼ中央、神崎郡五個荘町大字宮荘字清水ヶ井に所在し、草の根広場建設に伴う調査である。

遺跡の現状は、東を除く三方を南北36m、東西40mにわたりコ字形に、高さ2.8m・幅6mの土塁と堀を巡らせており、当初は中世の城跡かと考えた。

調査の結果、調査地には①江戸時代中・後期、②中世、③奈良～平安時代の3時期の文化面を検出した。この内、①は現存する弘化二年銘棟札を持つ建物や、区有文書の天明六年銘『近江神崎郡北庄村絵図』の時期に当り、井戸跡や建物礎石・溝等を検出している。『絵図』には、現存の土塁・堀と建物群が描かれており、「御蔵屋敷」と記入されている。なお、土塁や堀は中世の遺構群の上に構築されていることが判明した。

②は15～16世紀を中心とした時期で、土坑や溝・ピット群を検出している。当該期は『宮荘村史』に言う「北之庄合戦」期に当る。これは、永禄三年に佐々木六角氏の近習物頭であった宇野因幡守をはじめとする北之庄(現宮荘)在住の被官三名が、浅井長政方に内通し、主家に反旗を翻した事件で、居館に籠城したが一戦の後敗死している。『村史』では、この三名を「北之庄三人衆」と称し、その居館跡を小字内屋敷・殿屋敷・清水ヶ井などの調査地周辺としている。また、三人衆の首塚と伝承する塚も付近に点在する。

一方、③については、奈良～平安時代の遺物包含層を認めただのみである。これは、当遺跡に西接した宮荘殿屋敷遺跡で検出している。約方一町域に濠を巡らした平安時代の居館跡に係るであろう。この居館跡は、後世の「名屋敷」に先行するような荘園制に係るものと理解している。

以上、今回の調査では古代～近



遺構検出状況

世にかけての遺構を検出し、特に文献との対比が可能で、本町の中・近世史の究明に資するものであった。

(五個荘町教育委員会 林 純)

## 23. 古墳時代中期の竪穴住居検出

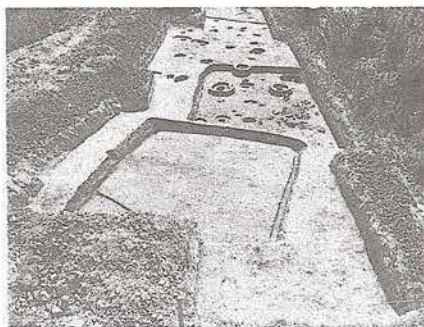
### 五個荘町竜田 横田遺跡

神崎郡五個荘町大字竜田字大地・浅井他に所在し、ここは愛知川左岸中位扇状地扇端の旧河道に沿った自然堤防上に占地する。

県営は場整備事業に伴う調査で、字大地地先(A地区)と字浅井地先(B地区)で遺構を検出している。

A地区では、古墳時代中期の竪穴住居跡2棟と、奈良時代に属する掘立柱建物跡2棟を検出し、B地区では中世の土坑23基と溝群を認めた。

土坑の形状は、一辺0.7～1.5mの方形で、深さは検出面から20～60cm程でフラットな底部となる。埋土中からは、人頭大～拳大の円礫数個を出土するものもあるが、大半は土師器の細片を微量出土するのみである。なお、炭化物や骨片、釘や木棺痕は認められない。これらの土坑群を全体的に観る時、中央に空間地を置いて、周辺に2～5基程度の小群が7～8群で構成していることが判る。また、部分的な切り合い関係にあるものの、その辺をほぼ同一方向に合わせるなど、相互の存在を意識した構築法が知れよう。



横田遺跡A地区

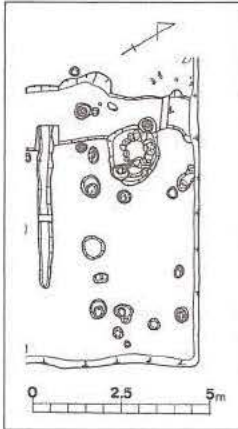
の掘立柱建物跡とも合わせて、微高地上に占地した古代集落の一実体として、地域史研究の鍵となるものである。一方、B地区の土坑群は、確たる心証は得ていないが、中世墓地として理解するのが今のところ最も妥当なようである。

(五個荘町教育委員会 林 純)

## 24. 室町後期の遺構群検出

### 秦荘町安孫子 安孫子城跡

安孫子城は、戦国の世佐々木氏の被官であった安孫子氏の居館跡として知られており、宇曾川中流扇状地の標高100m付近に位置する。当城は、南北2城存在



井戸跡付近遺構図

中心に実施し、以下の事実が明らかになった。

遺構として検出したのは、土坑跡、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡などである。時期は、室町時代後期が中心であり、一部江戸期に入ると思われる。調査地南西部には、室町期に一部整地が実施されている。各遺構とも、その埋土中に多量の炭化物の混入が見られた。

遺物としては、室町期～江戸期の信楽焼鉢、常滑焼甕・鉢、船載の青磁椀、土師器皿、瓦質火舎、古銭などがある。調査地北東部において検出された石組井戸埋土中からは、焙烙・土師皿等がかなりまとまって出土している。

当該調査地は安孫子北城の北西側に位置するものと考えられ、当地付近から南東にかけての地域に安孫子(北)城の施設が存することが明確になった。

(秦荘町教育委員会 林 定信)

## 25. 緑釉窯の発見

### 日野町中山 作谷窯跡

本遺跡は日野町大字中山字作り谷に所在し、従来より緑釉陶器窯跡が存在することは知られていた。立地としては、水口丘陵内部に形成された谷間の標高155m前後の丘陵南斜面に位置する。

調査は団体営ほ場整備事業に先立ち、国及び県の補助を受けて日野町教育委員会が実施した。現地での調査は昭和61年4月16日に着手し、工事により削平を受ける地域については同年9月5日に完了したが、窯跡の正確な分布等を明確にするため、引き続き地形測量及び磁気探査を続行中である。

現時点での調査の結果、窯体1基と灰原または灰原らしきも



作谷窯跡

のが数箇所検出された。窯体は1号窯と称し、灰原が伴っている。窯体の規模は現存長約2.3m、幅約1.0mである。その構造は約30cmの段差により燃焼部と焼成部が明確に区分されている。燃焼部は長さ約1.1m、幅約0.8mの中央部に舟底に窪む楕円形である。焼成部は、底面が約25～28度の傾斜をもつ溝3条とあぜ2条により構成されている。あぜは削平されているが、おそらく2段の階段状の平坦面になると思われる。

溝は断面U字状で最大幅約20cmである。1号窯の灰原は窯体の南方約1.5mの位置にあり、東西約7.0m、南北約5.0mの範囲にわたり広がっている。これ以外には、1号窯直上に遺物が集中して出土しており、2号窯灰原と称した。また、その東方約200mの位置にも灰原らしき遺物包含層が検出され、3号窯灰原と称した。

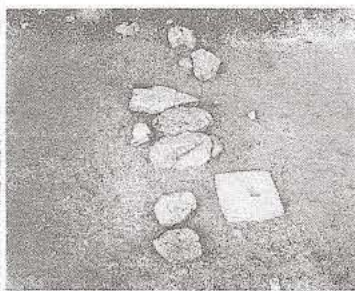
遺物は、1号窯及びその灰原と2号窯灰原より、緑釉陶器片(椀・皿)・窯道具(三叉トチン・焼台)等が出土している。年代としては10世紀後半と思われる。また、3号窯灰原は8世紀後半の須恵器・土師器等が出土している。(日野町教育委員会 日永 伊久男)

## 26. 中世の墓地跡

### 日野町西明寺 蓮台遺跡

当遺跡は蓮台野中世墓群として知られており、昭和42年の牧草地開墾に伴う調査でも数々の蔵骨器・石仏、五輪塔等が検出された。今回の調査は表土除去を必要とする箇所2ヶ所、踏査2ヶ所の計4地区において実施したが、いずれも中世墓群の群域外であったため主体部自体の調査はできなかった。わずかに第2調査区において中世墓の一部と考えられる石列を検出し、その付近より長さ30cm、幅約20cmの三角形の石に線刻で五輪塔を描いたものが出土している。この遺物については現在のところ県内例は知見し得ず、畿内における類例を調査している。

蓮台野中世墓群はその総数すら把握し兼ねる程の数であり、西明禅寺に安置される蓮台野から発見された石仏だけで300余体を数える。この貴重な歴史的資料を荒廃、散逸等から守ってゆくために、中世墓群の全



第2調査区 石列遺構(南より)

(勸励賀県文化財保護協会 清水 尚)

体像を把握し、周囲に座する綿向山等の山岳信仰を含めた西明禅寺周辺の中近世における庶民信仰の在り方を考える必要があるだろう。